

# 砺波カイニヨ倶楽部会報

第十七号

平成十二年十二月発行 発行者 砺波カイニヨ倶楽部 代表幹事 柏樹直樹  
事務局 富山県砺波市表町七-二十五 TEL 0763/33/6588  
天野一男建築工房内

## 散居で自然林にこだわる

### 【林 梅夫さん宅での勉強会に二十五名参加】

十月二十九日、林梅夫さん宅（砺波市小杉）の屋敷林見学会は、あいにくの小雨の中、二十五名が参加した。今回は、林さんが散居村で鳥や小動物と一緒に住める屋敷林づくりにこだわってこられた内容と変化、そのなかにつらぬかれた含蓄のある林さん自身の哲学にも触れることのできた勉強会となつて、参加者の感銘は大きかった。林さんは、長年、鳥の研究をされ、屋敷林に住みつく鳥の特性や変化についても、おもしろく解説され、子供達も積極的に質問していた。

屋敷林は、潜在植生をベースに里山の木や花実のつく樹種が沢山入れられ自然林に近づくような工夫がいっぱい。水溜まりや落ち葉の集積場も屋敷林内にとりこまれ、歩道が迷路のようにつくられていた。上木の主木はスギ、数種類の花ケが外壁をつくり、家屋との空間に各種の中小木が成立。



(林さん宅南東面の樹木を見る)

花や実のなる木として、カキ、イチジク、ブドウ、カマツカ、サカキ、ヒサカキ、コマユミ、モチノキ、ナツメ、ヤツデ、サンシヨウ、サンシユウ、ムラサキシキブ、ナンテン、クリ、グミ、コウメ、ハゼ、アケビ、シロヤマブキ、ザクロ、ウメモドキ、ツバキが入っている。

屋敷林の探索説明のあと、前納屋に入りお茶を飲みながら小鳥や虫の話、子供の頃の思い出、年若いからの屋敷林との関わり等、林さんの人となりも含めた奥深い話に時間を忘れ聞き入った。

#### 〈参加者の感想〉

◇高橋敬一さん

「子供の頃に引き戻された。心が洗濯され、こうした環境を大事にしていきたい。これが富山県の原風景だろうと思った。」

◇出村 忍さん

「屋敷林を外から実体的に見ることも大事だ。」

◇加藤悦夫さん

「生物学者の自然を意識した屋敷林に心身ともに引き込まれ、敬服する。こうしたことを受け継ぐ人的跡継ぎが必要だ。」

#### 教育放送で取材

この例会の様相をNHK学校放送番組部が取材し、十一月二十七日NHK教育テレビの「くらし発見」で小学校四年生向け社会科番組として放映された。再放送を三回やられ、沢山の人達に砺波の散居村と屋敷林にふれてもらう機会になった。



#### 林さんのお話のあらまし

○四季、訪れる鳥の種類・約四十種だったが、ほとんどみなくなった鳥が二十種近くになっている。  
○散居の屋敷林で営巣する鳥：モズ、キジバト、スズメ、ツバメ  
○屋敷林と深く関わる昆虫は十八種はいる。  
○約二十平方メートルの浅い池に生きている生物の話。  
○子供と屋敷林：豊かな人間性を養い、感性を養う体験の場、自然を理解する身近な教場。  
○老いてからの屋敷林：四季の花鳥風月を楽しみ、孫たちへの語りの場、健康増進の場である。  
○散居の屋敷林は、それぞれの小さな生態系で、その集合によって砺波地方の生態系がつくられている。



(林さん(右)の説明を聞く)

# 空家活用と散居の活性化をめざし

## 福光町で『カイニヨ祭』を試みる

十一月十六日夜

梅原邦荘へうめはらほうそう(福光町梅原)で『カイニヨ祭』を開いた。これには二十二名の会員や役場の方々が参加した。祭り前の約一時間、屋敷林や散居村のあり方等で意見交換した。

柏樹代表幹事が祭を催した主旨等をふくめ挨拶(以下項)したあと、梅原邦荘の歴史と旧家の残された経過について地元福光町の水口さんが説明された。  
出された主な意見は次のとおり



(広間での座談会)

◇加藤さん(高岡)

カイニヨにしばった活動にせず、広くいろんな伝統を呼び起こす活動がよい。報恩講の「おとき」がすたれているが残念なことだ。寺主催で五十年後の子孫に残す手紙を書く機会があったが私は「雨もりさせず、木は切らず、田を耕せ」を手紙に書いた。

◇高田さん(砺波)

屋敷林の維持が大変になっている。地球的な緑を残すことの意味を全面に押し出す事だ。家を建て直すことにカイニヨは減ってしまい、とても景観は守れない現状にある。

◇金平さん(城端)

カイニヨの中味を学び、散居村の風景を大切に、自分の故郷に誇りを持つ武器に屋敷林を位置づけていきたい。

◇大沢さん(砺波)

カイニヨのなかで、育ったものとして、その良さとなつかしさがああり、今こそ情操教育に役立ててほしい。維持管理が大変だろうが、文化遺産として住む人がよいと思うことだ。落ち葉も、その音、風情、形の全てが自然美だ。庭のコンクリート化は決して良いとは思えない。

◇佐野さん(高岡)

四才の娘が三十年後にどんな家に住むのか、私は屋敷林にこだわりカシを植え、その下で生き続けたい。

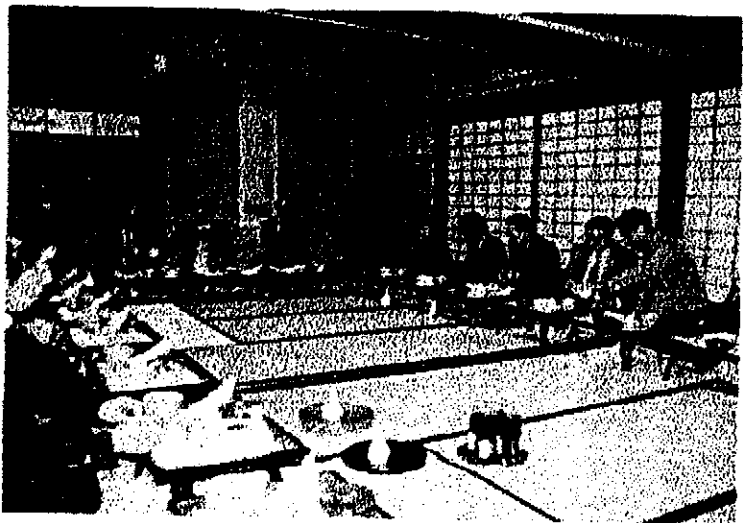
◇高田さん(砺波)

文化遺産として散居村という「面」の意味は大きい。行政のまとめが重要になってくる。

◇加藤さん(高岡)

田園空間というハイカラな名前が気に入らない。時折行政はふりまわし、ほおりに出すことがある。散居村は、不便の代名詞だった。評価するならその生活者の意向をしっかりとふまえることであり、屋敷林の変遷と同時に人の命をどうつなぐのかに光を当てることだ。

このあと約二時間酒を酌み交わし散居村の暮らしや農業、カイニヨ維持の話題で秋の一夜を楽しんだ。この梅原邦荘は十本余りのカシの大木につつまれた静かな料理屋として活用されている。



(座敷で懇親会)

### 柏樹代表幹事の挨拶

○二十世紀は森とそれにつながる社会の大虐殺時代だった。それによって人の心・心のよりどころを失ったように思われる。

○屋敷林や森の事を語ることによって気づかないうちに見失ってきたいろんな事に思いをはせることができる。

○風景の独自性を作り出す時代だ。子供の顔が地域性をなくしているが、これも食べ物や生活習慣の均一化によるのではないか。

○地域性をいかに、味をひきつぐこともカイニヨ倶楽部の意図することと考え、散居村の伝統を維持し、料理を作ってみるこの場での、祭という名の遊びの場を設けた。色んな意見交換と交流が出来たらと期待している。

○日頃、この会の主旨に賛同いただき協力下さっている大沢すみ様と稲垣忠一様への感謝の意も表明しておきたい。

来年も

良い年で

あります

ように

